

編集後記

富良野医師会創立六十周年という大きな節目を迎え、記念誌を発刊できますことを、心よりうれしく思います。六十年という年月は、振り返れば長く、しかし過ぎてしまえば、まことにあっという間でもあります。

私どもの「かわむら整形外科」も、今年で開院五十六周年を迎えます。父がこの地に診療所を開設して以来、その歩みのほとんどは、富良野医師会の歴史と重なっています。地域の先輩医師や仲間に支えられ、時には力を合わせ、時には議論を重ねながら、富良野の医療の一端を担ってきました。そう考えますと、富良野医師会の六十年の歴史は、決して遠い過去の物語ではなく、私たち一人ひとりの日々の診療と、それぞれの医療機関が積み重ねてきた歩みそのものではないかと思います。

もちろん、この長い歴史のすべてが平穏であったわけではありません。医師会員同士の考え方が異なり、互いの思いが十分に伝わらず、関係が必ずしも良好とはいえない時期もあったことでしょう。しかし、それは誰か一人の責任として語られるべきものではありません。それぞれが自らの医療機関を守り、職員を守り、何より患者を守ろうと懸命であったからこそ、意見の違いや行き違いが生じたのだと思います。

大切なのは、過去の違いにとどまることなく、そこから何を学び、これからどのような関係を築いていくかです。診療科や医療機関の規模、立場の違いを越え、同じ地域医療を担う者として、患者と地域住民の側に立ち、同じ方向を見つめていかなければなりません。互いを尊重し、顔の見える関係の中で率直に語り合い、困難なときには手を差し伸べ合う。その積み重ねこそが、富良野の医療を支える最も確かな力になると信じています。

いま、医療機関を取り巻く環境は、かつてないほど混沌としています。人口減少と高齢化、医師や医療従事者の不足、医療と介護を支える制度の変化、物価や人件費の上昇など、私たちの前には容易に答えの出ない課題が立ちだかっています。何が正解なのか、誰にも明確には分かりません。一つの医療機関、一人の医師だけで解決できる問題でもありません。

だからこそ、いま必要なのは、誰かを責めることでも、自らの立場だけを守ることでもなく、互いの違いを認めながら知恵を持ち寄り、手を取り合うことではないでしょうか。病に苦しみ、不安を抱えて私たちを頼ってくださる患者を、少しでも救いたい。その医療者としての原点だけは、いかなる時代にあっても忘れてはなりません。

先人たちが六十年にわたり守り育ててきた富良野の医療を、次の世代へどのようにつないでいくのか。私たちは、いまその責任を担っています。この記念誌が、これまでの歩みを振り返るだけでなく、会員相互の理解と絆を深め、これからの富良野地域の医療をともに考える契機となることを願ってやみません。

富良野医師会の新たな一歩が、地域住民の安心と、未来への希望につながることを祈念し、編集後記といたします。

富良野医師会創立 60 周年記念誌編集委員長

川村大介

富良野医師会60周年記念誌

令和 8 年（2026 年）10 月 1 日 発行

発行者 一般社団法人 富良野医師会

制作会社 フラノデザイン株式会社